

ウィトゲンシュタイン前期のフレーゲ批判

——一般性の問題を中心に——

渡辺 大地

ウィトゲンシュタイン前期の代表的著作『論理哲学論考』の独自性的一端は、彼が多大な影響を受けたフレーゲの「論理学」概念の切り詰めにある。では、ウィトゲンシュタインはフレーゲの「論理学」概念の内の何を切り詰め、何を継承、展開したというのか。

「命題が真であるためには、なによりもまず真であることが可能でなくてはならない。そしてこのことのみが論理学の関心事である」(NB 20)といったウィトゲンシュタインの所見は、この間に一つの解答を与える。フレーゲにとって、「論理学」はそれ固有の真理を法則として含む。「論理学の関心事」に関するウィトゲンシュタインによるこの制限は、フレーゲの「論理学」概念の内のこの部分の切り詰めに意図している。

命題が「真であることが可能」であるとは、命題が有意味だということである。ゆえにウィトゲンシュタインの考える「論理学の関心事」とは、命題の有意味性の条件である。フレーゲは、証明による法則の確立を厳密に実行するため、論理的構文論が整備された記号言語、いわゆる「概念記法」を開発した。ウィトゲンシュタインは、このような理想的な言語の開発による命題の有意味性の条件の明確化 (T3・325)、またこれによって遂行される「思想の論理的明晰化」(T4・112) といった課題をフレーゲから受け継いだ。つまりウィトゲンシュタインは、フレーゲの「論理学」概念に含まれる、証明による法則の確立といった部分を切り詰め、フレーゲにとってはその準備段階に過ぎない、「概念記法」の開発による命題の有意味性の条件の明確化のみを「論理学の関心事」と考える¹⁾。

更にウィトゲンシュタインはこのような切り詰めから、逆にフレーゲの「論理学」概念を批判する。フレーゲにとって、「論理学」はそれ固有の真理を法則として含み、この意味で「科学 (Wissenschaft)」であった。「論理学は科学ではない」(NB 120)といったウィトゲンシュタインの主張は、このような切り詰めが正当なものであるとの彼の確信を表している。

このような事態が最も端的に現れているのは、論理的な一般性に関するフレーゲの見解に向けられたウィトゲンシュタインの批判である。後に見るように、ウィトゲンシュタインによれば、フレーゲは論理的な一般性と、例えば「すべての人間は死すべきものである」といった一般的命題によって表現される一般性（仮に後者の場合の一般性を「通常的一般性」とでも呼んでおく）とを同一視している。このことによってフレーゲの「論理学」は、それ固有の真理を含む科学であるといった見かけが生じる。これがウィトゲンシュタインの批判の骨子である。本稿では、この批判を吟味し、そこからウィトゲンシュタインの考える論理学の大枠と、フレーゲの論理観への批判の動機を明らかにする。

1 「最も一般的な科学」としての「論理学」

まずウィトゲンシュタインの批判の妥当性を吟味するため、フレーゲの「最も一般的な科学」としての「論理学」といった見解を取り上げ、ウィトゲンシュタインの考える「論理的な一般性と通常的一般性の同一視」といった事態が実際にはいかなるものかを見て行く。

1-1 論理法則のフレーゲによる特徴付け

通常的一般性はある特定の一般的命題によって表現され、一般性の成立は当の一般的命題が真であることに基づく。フレーゲの考えでは、論理的な一般性を表現する一般的命題は論理法則である²⁾。フレーゲの公理的な論理体系において、論理法則は、他の論理法則から証明されることで、その真理が正当化される³⁾。すべての論理法則がそこから導き出される基礎となる論理法則が、いわゆる論理的公理である。公理はその位置づけからもわかるように、他の論理法則からは証明され得ず、ゆえにその真理は正

当化されえない。それにもかかわらずフレーゲは、公理は直接自明な基礎的真理であり、真とされるある内容をもつことを強調する⁴⁾。さもなくば、論理法則を公理から証明することで、その真理を正当化するという試みは、成立しえないだろう。

公理を含む論理法則のフレーゲによるこのような特徴付けをみるなら、彼が論理的な一般性を通常の一般性と同じ枠組みで扱っていることが理解されよう。つまり論理的な一般性も、通常の一般性と同様に、ある特定の命題によって表現され、その一般性の成立に関して、当の命題が真であることが必要不可欠である。基礎的真理である公理からの証明は、この点を保証する。後に検討するが、以上のことが、ウィトゲンシュタインの批判が述べようとしている論理的な一般性と通常の一般性の同一視といった事態である。

1-2 一般性の範囲に基づく論理学の位置付け

論理的な一般性も通常の一般性も、それぞれある特定の命題によって表現され、当の命題が真であることによって成立する。その一方でこの二つの一般性は、一般性の範囲に関して区別される。論理法則が表現する一般性は、その範囲が最も広く、その真理は「最も一般的な真理」、それを固有の真理とする「論理学」は「最も一般的な科学」である⁵⁾。論理法則は、確定した意味をもつシンボルと確定した意味をもたないシンボルによって定式化されている。前者のシンボルは、フレーゲの「論理学」では、普遍性を表す普遍量化記号、否定記号、条件法記号であり、これらのシンボルは、およそいかなる主題についてであれ、言明をなすのに使われうるという意味で、主題—中立的なシンボルである。後者のシンボルは、いわゆる変項であり、このシンボルはいかなる特定の対象も表さず、当の変項を束縛する量化子の変域は、無制約的なものと見なされる。この変域には、あらゆる科学のすべての対象が含まれる⁶⁾。論理法則の定式化が変項と主題—中立的なシンボルのみによってなされているという点が、論理法則が表現する一般性を最高度のものとし、論理法則の真理を「最も一般的な真理」、当の法則のみを含む「論理学」を「最も一般的な科学」とする。

フレーゲは、そこに含まれる法則の一般性の範囲によって、真理を問題

とする学問、つまり科学が階層化されると考えていた。その頂点には、算術を含む「論理学」、その下に幾何学、以下いわゆる経験諸科学といった具合に、諸科学はそこに含まれる法則の一般性の範囲によって階層化される。そして「論理学」の他のあらゆる諸科学へ適用の可能性は、論理学がこのような階層の頂点にあることから説明される。

このような一般性の階層の頂点にあることのみをもって論理学を他の諸科学と区別するという事は⁷⁾、「論理学」の独自性を実在からの抽象度の程度にのみ基づけることに等しい。例えば物理学は、「熱」や「重量」といった語彙を含む法則によって実在のある側面にかかわり、またこのような語彙の法則への登場がその一般性に制約を与えている。これに対し論理法則は、このような特定の主題に関する語彙が登場しないにせよ、真とされるある内容をもつ。そしてそのような法則のみを含む「論理学」は、いわば「実在の最も普遍的な特徴」にかかわるといった見かけが生じる⁸⁾。

2 ウィトゲンシュタインによるフレーゲ批判と「論理的な一般性」

ウィトゲンシュタインの考えでは、論理学＝科学といったフレーゲの見解の背後には、「論理的な一般性と通常的一般性との同一視」がある。ゆえにフレーゲの見解への批判とは、論理的な一般性と通常的一般性とをまったく異なるものとして捉えることである。それでは、ウィトゲンシュタインの考える「論理的な一般性」とは何か。

2-1 「すべて」という観念とフレーゲ批判

まずはウィトゲンシュタインによる批判の表明から話を始める。

わたしはすべてという概念 (Begriff Alle) を真理関数と切り離す。

フレーゲとラッセルは、一般性 (Allgemeinheit) を論理積または論理和と結合して導入した、これによって二つの観念が含まれる“($\exists x$).fx”、“(x). fx”といった命題が理解しがたくなってしまった。(T5・521)

この所見にはややこしい事情がある。この時期ウィトゲンシュタイン

は、量子子が真理関数的に（つまり連言もしくは選言に）解釈可能であると考え⁹⁾、またこの考えを、フレーゲ、ラッセルも共有していると誤解していた。この二つの誤解を差し引くならば、ここでウィトゲンシュタインは、「すべてという概念」、「一般性」を量化（引用箇所表現では「真理関数」）から切り離すことを主張しており、フレーゲとラッセルは、「一般性」を量化と結合して導入していると批判されている。ここでウィトゲンシュタインが量化と切り離すべきであると主張する「一般性」が、ウィトゲンシュタインの考える「論理的な一般性」である。そして一般的命題に含まれる「二つの観念」とは、「論理的な一般性」と量子子によって表現される通常的一般性である。要するにウィトゲンシュタインはここで、「論理的な一般性」と通常的一般性とを二つの独立した観念と考え、フレーゲはこの二つの観念を同一視したと批判している。「T6・1232」では通常的一般性に比して、「論理的な一般性」が「本質的」と述べられている。それでは「本質的」という語によって通常的一般性と区別されている、「論理的な一般性」とはいかなるものか。

2-2 表現の形式の明示化と「論理的な一般性」

ウィトゲンシュタインの考える「論理的な一般性」とは、表現（シンボル）は形式（他の諸表現との有意味な結合の可能性）を前提とするといった彼の表現に関する洞察に基づいている。

表現とは、「命題の意義を特徴づける命題の各部分」であり、「命題自体も一つの表現である」(T3・31)。また、「表現とは、命題の意義にとって本質的なものであり、諸命題が相互に共有しうるものの全てである」(ibid.)。 “fa”, “aRb”, “aRc” などの諸命題を例に考えるなら、そこでは表現 “a” が相互に共有され、これらの命題はいずれも表現 “a” の意味に関して何事かを述べるような意義をもつ。つまり表現は、それが登場する諸命題の意義を特徴づける。表現は、それが登場しうる諸命題の形式もまた特徴付ける (ibid.)。

表現は、それが登場し得るすべての命題の形式を前提とする。表現は、あるクラスの諸命題に共通の、特徴的なメルクマールである。(T3・

311)

この所見に現れる「すべて」がウィトゲンシュタインの考える「論理的な一般性」の一例である。ここで言及されている「クラス」は、「論理的な一般性」によって特定される。そしてこの特定の可能性は、表現が形式を前提とすることに基づいている。以下でこの点を説明する。

表現“a”を例として考えるなら、これは“fa”, “ga”……といった命題の形式 ϕa (ϕ は変項) や“aRb”, “aRc”……といった命題の形式 aRx を前提としている。このことは、表現“a”が、命題を形成するための他の諸表現との有意味な結合の可能性を前提として成立しているということである。表現“a”の登場しうる諸命題はあるクラスを形成し、このクラスを特徴づけるメルクマールは、表現“a”の登場である。例えば“a”外の部分を一括して変項 ξ で表すことが可能であれば、このクラスは“ ξa ”で特定されよう。そしてこの ξ に代入可能な項を代入することで、このクラスの成員である、“a”を含む諸命題が生じる¹⁰⁾。

したがって表現は、それが特徴づける諸命題の一般的形式によって描出される。

しかもこの形式においては、表現が定項的、他の全ては可變的となる。(T3・312)

表現“a”が特徴付ける諸命題の一般的形式である“ ξa ”は、表現“a”が前提とする結合の可能性(形式)を明示しているという意味で、表現“a”の適切な描出である。この“ ξa ”は、「当の表現を含む諸命題を自らの値とする変項」、「命題変項(Satzvariable)」とも呼ばれる(T3・13)。

表現の適切な描出は、命題変項としての描出である。その変項への代入可能な項の代入は、必ずある命題をその値とする(文脈原理)と言う意味で、「変項はいずれも命題変項と見なすことができる」(T3・314)。

表現が、他の諸表現との結合の可能性、つまり形式を前提とするということは、表現が命題変項として適切に描出されるということである。そして「命題変項がいかなる値を取ることが許されるかは、前以て決まってい

る」(T3・316)。「命題変項の値の確定とは、変項が共通のメルクマールとなっている諸命題を陳述することである」(T3・317)がゆえに、表現には、それをメルクマールとする諸命題のクラスが対応する。

表現は形式を前提とし、当の形式は、命題変項として表現を描出することによって明示される。そして命題変項がいかなる値を取ることが許されるかは、前以て決まっている。ウィトゲンシュタインの考える「論理的な一般性」は、命題変項の値の確定といったこの場面で現れる¹¹⁾。例えば表現“a”は、“ ξa ”と描出されることで、それが前提とする形式が明らかとなり、“ ξa ”は、当の形式を共有するすべての命題のクラスを特定している。「一般性の表示 (Allgemeinheitsbezeichnung) は変項として現れる」(T5・523)のであり、量子子の使用とは結びついていない。

以上のことから、ウィトゲンシュタインの述べる「論理的な一般性」について次のように言えるだろう。表現が形式を前提とするということは、表現がかかる「論理的な一般性」を前提とすることにほかならない。表現の形式が変項の使用によって明示されると同時に、「論理的な一般性」も我々の前に現れる。つまり「論理的な一般性」は、表現の有意味性の条件を明らかにするという構文論的な試みによって我々に与えられるのであり、フレーゲの述べる論理的な一般性のように、ある特定の一般的命題によって表現され、それが真であることによって成立するのではない。

2-3 一般的命題が含む二つの観念

それでは、「論理的な一般性」が通常的一般性に比べて「本質的」と呼ばれる意味はどこにあるのであろうか。その意味は、すべての表現が「論理的な一般性」を前提に成立しているということにある。このことは一般的命題に関しても例外ではない。

先に一般的命題には、「論理的な一般性」と通常的一般性といった二つの観念が含まれていると述べられていた。“ $(x). fx$ ”を例に取るならば、「論理的な一般性」は“ fx ”によって示されている。つまり“ fx ”は、命題変項として、“ fa ”, “ fb ”, “ fc ”, といった値を確定している。“ (x) ”といった量子子は、“ fx ”から特定可能なこれらの諸命題のクラスに対して、連言的にかかわることを表示しているに過ぎない¹²⁾。量子子が機能し、一般的命題

が通常的一般性を表現するためには、そこに含まれる命題変項の値がまず確定していなくてはならない。つまり、一般的命題によって通常的一般性が表現されるためには、ウィトゲンシュタインの言う「論理的な一般性」が前提とされなくてはならない。このことが、「論理的な一般性」が通常的一般性に比べて「本質的」と呼ばれる意味である。そしてこのような「論理的な一般性」にのみ論理学はかかわるとというのがウィトゲンシュタインの主張である。

3 「論理的な一般性」と論理学の位置付け

それでは、「論理的な一般性」は、『論考』においていかなる役割を果たしているのか。『論考』序文において語られている「語り得るものの境界は言語の内側から画定される」という考えは、この「論理的な一般性」に基づいている。この点を以下で明らかにして行く。

3-1 論理的原型

まずウィトゲンシュタインの以下の所見の解釈から話を始める。

対象が与えられている場合、これとともにすべての対象もまたすでに与えられている。

要素命題が与えられている場合、これとともにすべての要素命題もまた与えられている。(T5・524)

ここで言及されている「すべて」は、「論理的な一般性」である。では、このような一般性によって、いかにして対象からすべての対象が与えられ、また要素命題から、すべての要素命題が与えられるといえるのか。

対象が我々に与えられるのは、直示によってではなく、あくまで表現の指示対象としてであるとしよう。例えば、表現“a”の指示対象として、対象aは我々に与えられる。表現“a”の適切な描出は、例えば“fa”の“f”を変項ξで置き換えた命題変項“ξa”としての描出であった。ウィトゲンシュタインは、すべての定項を変項で置き換えた際に残るものを、「論理

的原型」, もしくは「論理形式」と呼ぶ(T3・315). わたしの例では, “ ξa ”の“a”を変項 x で置き換えた際に残る ξx が論理的原型に当たる. “ ξa ”が, ξx の x への“a”の代入の結果とみなされうるように, “ ξa ”は論理的原型 ξx を前提として成立している. そしてこのことは, “ ξa ”が, 論理的原型 ξx の x に代入可能なすべての表現, ξ に代入可能なすべての表現, そしてこれらのすべての表現から形成可能なすべての命題を前提として成立しているということである. “ fx ”などの他の表現に関しても話は同じである.

“ ξa ”は“a”をメルクマールとするすべての命題の集合を特定していた. これに対して論理的原型は文字どおりすべての命題を特定する. いわば命題を含むすべての表現が, このような論理的原型, 論理形式を前提として成立している.

論理的原型 ξx を前提とする命題を要素命題と仮定するなら¹³⁾, ウィトゲンシュタインの所見は次のように解釈される. 対象 a は“ ξa ”の指示対象として与えられる. “ ξa ”は論理的原型 ξx を前提として成立している. ξx の x に代入可能な名前の指示対象を仮に「対象」と呼び, ξ には, 名前の配列の仕方がはいるとすれば¹⁴⁾, “ ξa ”は ξx を前提とすることで, すべての対象, およびその配列法を前提として成立している. また要素命題を仮に“ fa ”とするならば, “ fa ”も ξx を前提として成立している. したがって“ fa ”は, x に代入可能なすべての名前, ξ に代入可能な名前の配列法のすべてを前提とすることで, すべての要素命題を前提として成立している. これが先の引用箇所でもウィトゲンシュタインが主張していることの一つの解釈である.

あらゆる表現を表現たらしめるもの, つまり論理的原型, 論理形式を指摘することは, 表現の論理的構文論的振舞いを限なく特徴付けることである. そしてこのことと同時に, すべての対象, すべての要素命題がいわば一挙に与えられる. 対象すべての境界, 要素命題すべての境界は, 表現の論理形式を明らかにするといった構文論的探求によって「言語の内側から」画定されるのであり, 「言語の外側から」, つまりある特定の一般的命題が真か否かを探求することをもって画定するのではない. 先に一般的命題について論じたことから明らかのように, むしろこのような探求そのものが, すべての対象, すべての要素命題を前提として初めて成立する.

3-2 フレーゲの「論理的な基礎連関」

それではフレーゲには、ウィトゲンシュタインの言う意味での「論理的な一般性」に相当する概念は、存在しないのか。もちろん答えは否である。命題におけるその部分表現を変項へと変え、これにより論理形式を明示するというウィトゲンシュタインの方法は、明らかにフレーゲからの遺産である。

『算術の基本法則』においてフレーゲの援用する除去 (Ausschliessen) という構文論的な方法は、命題における全ての定項、更には変項をも最終的には除去して、項場所 (Argumentstelle) のみを残す。例えば “F(a)”, “R(a,b)”, “(x).F(x)” は、項場所を指示するメタ変項を用いて、それぞれ “ $\phi(\xi)$ ”, “ $\psi(\xi, \zeta)$ ”, “ $\mu_{\beta}\phi(\beta)$ ” と表記される。「Ausführungen ……」では、こうした「 ξ が $\phi()$ の下に帰属する (fallen unter)」や「 ϕ が $\mu_{\beta}()$ に内属する (fallen in)」という事態は、「論理的な基礎連関 (Logische Grundbeziehung)」と称されている¹⁵⁾。これがウィトゲンシュタインの言う「論理形式」に相当する。

また、“F(a)”の“a”を除去することで取り出される概念語“F(ξ)”が有意味であるためには、 ξ に代入可能なすべての名前に関して、代入した全体は意味を持たなくてはならない¹⁶⁾。このような「概念の有意味性条件」に現れている「すべて」は、ウィトゲンシュタイン的な意味での「論理的な一般性」である。

とするならば、フレーゲにおいても、構文論的な次元ではウィトゲンシュタインの述べる「論理的な一般性」の概念も存在することになる。フレーゲはこのような構文論的な次元での洞察に基づき、理想的な表記法である『概念記法』を開発し、更にもその上で算術を基礎づけるような法則の確立を公理的な形で展開した。そしてその法則の持つ「最も一般的」という特徴に、「論理学」の独自性を基づけた。冒頭でみたように、ウィトゲンシュタインは後者の側面を切り詰め、前者のみを「論理学の関心事」として残す。そしてこのことによって、論理学は命題の有意味性条件にのみ関わる、といった独自性を持つとされる。それでは、このような切り詰めによってウィトゲンシュタインの考える論理学は、いかなるものとなるのか。

3-3 命題の一般的形式と論理空間

ウィトゲンシュタインは、すべての命題が以下のように与えられると主張する。

すべての要素命題がわたしに与えられたとしよう。そのときただちに、それらからいかなる命題が構成可能か、と問うことができる。そしてそこでわたしはすべての命題を持つのであり、それらはこのように境界付けられている。(T4・51)

ウィトゲンシュタインは、すべての命題（一般的命題を含む）が要素命題から真理関数的に構成可能であると考えた。要素命題から真理関数的に構成されるすべての命題は、 $[\bar{p}, \bar{\xi}, N(\bar{\xi})]$ をその一般的な形式としている (T6)。このような一般的な形式の指摘によって、いまやすべての命題が、一挙に我々に与えられる。つまり語り得るものの境界が、構文論的探求によって、言語の内側から画定される。そして命題間の論理的関係（含意や矛盾など）も、そのとき同時に与えられる。この点を以下で説明しよう。

ウィトゲンシュタインは、“fa”と“(∃x). fx. x=a”が同じ命題だと考えていた (T5・47)。後者の命題に顕著な点は、“fa”が“f”と“a”との単なる合成ではなく、形式が前提とされていることを“fx”の登場によって明らかにしていることである。“(∃x)”を“~(x)~”と書き換えれば、“(∃x). fx. x=a”には、普遍量化子、否定、連言が登場し、これらから、他のすべての論理定項が導出される。つまり、“fa”は、諸論理定項が作る論理空間を前提として成立している。そしてこの論理空間を織り成す一本の糸が、命題の一般形式と呼ばれるものである。

ウィトゲンシュタインは、「命題が真であることを可能とするもの」が論理学の関心事であると述べていた。論理空間こそが、このような可能性の空間である。“fa”といったたった一つの命題ですら、語り得ることすべてを前提とし、同時に論理空間をその背後に持つ。そしてこのことを明らかにするために必要とされるのは、構文論的な探求である。

4 フレーゲの論理観への批判の意味

以上で私は、冒頭で述べた課題の前半を果たしたと信じる。以下では、ウィトゲンシュタインをフレーゲ的「論理学」概念の切り詰めへと走らせた、「哲学的動機」が何かを明らかにしたい。なぜ、「1」で見たようなフレーゲの論理観は批判されねばならなかったのか。

4-1 体系と全体

ウィトゲンシュタインは、『ウィトゲンシュタインとウィーン学団』に収められた付論「全体と体系」において、「論理的な一般性」と通常の一般性の区別を、それぞれが与える集合の区別として定式化している。そこで彼は、それぞれが構成する集合に本質的な区別が存在すると論じ、この区別を「体系 (System)」と「全体 (Gesamtheit)」といった言葉で表す。ここでも「この区別は、「有意味」という語と「真」という語の区別に関係している」(WWK 213)。

ウィトゲンシュタインは、「この部屋の中にある帽子の集合」の特定に関して、大略次のように述べている (WWK 213)。「この部屋のなかにある帽子の集合」を与える「ある性質 (命題関数)」を“fx”で表すとする。我々がこの性質を知る、つまり“fx”の値として確定される諸命題の集合がどのような集合かを知っていたにせよ、このことから直接「この部屋のなかにある帽子の集合」を特定することはできない。この特定には、この集合に属する命題のうちのどれが真であるかを知らなくてはならない。つまり当の性質の外延である「この部屋のなかにある帽子の集合」は、“fx”が特定する諸命題の集合の部分集合である。この部分集合の境界は「経験」によって引かれている。これに対し“fx”が特定する諸命題の集合は、“fx”の「有意味性の範囲」として特定されている。

この話は、「2-3」でみた一般的命題に関する説明と同じである。ウィトゲンシュタインはこの点を以下のようにまとめている。

真なる命題の集合は、有意味な命題の集合とは全く異なる仕方で、境界づけられている。真なる命題の集合においては、その境界は経験に

よって引かれるのに対し、有意味な命題の集合においては、その境界は言語の構文論によって引かれているのである。経験は、真なる命題の集合を外から境界づけるのに対し、構文論は有意味な命題の集合を内から境界づけるのである。かくして命題関数の意味領域（即ち、それに対して fx が有意味になるところの、変項 x の値の全体）は、その命題関数の性質によって内から境界づけられているのである。（WWK 213-214）

言語の構文論によってその境界が引かれている「有意味な命題の集合」は「体系」を成し、経験によってその境界が引かれている「真なる命題の集合」は「全体」を成す。以下ではこの「体系」という概念をより明確化し、『論考』における「論理的な一般性」との結び付きを示したい。

「長さについての言明はある体系の中にある」ということで、ウィトゲンシュタインが主張することは、ある物が3メートルの長さであるということの理解が、それが5メートルの長さであるということの理解を含んでいるということである（WWK 89）。ウィトゲンシュタインはこのことを、「長さについての言明は、既に可能な長さの空間の中にある」と言い換えている。

このことの一般的な定式化は次のように与えられる（WWK 89-91）。命題“ fa ”の理解は、“ fb ”、“ fc ”、……の理解を前提とし、また“ ga ”、“ ha ”、“ aRb ”、……の理解も前提とする。前者の理解の連関は、“ fa ”の“ a ”を変項に置き換えることで、“ fx ”が特定する諸命題の「体系」として把握される。後者の理解の連関は、“ fa ”の“ f ”を変項に置き換えた“ ξa ”が特定する諸命題の「体系」として把握される¹⁷⁾。このことが、どんな命題もある論理空間の中にあるということである。“ fa ”のすべての定項を変項で置き換えた論理形式 ξx は、この論理空間を明瞭に示す。

ここで、『論考』における「論理的な一般性」という概念と「体系」という概念の関係が理解できよう。命題は、その理解に際して相互に関連している¹⁸⁾。この連関は、命題の定項を変項に置き換えるという構文論的な操作によって、明らかにされる。この場面で「論理的な一般性」は登場する。そしてこのような相互に関連した命題は、一つの「体系」を成す。

4-2 空間点の集合と可能性の空間

それでは、「体系」と「全体」を区別することのポイントは何か。ウィトゲンシュタインは、空間点の集合が、「体系」を成すと考え、空間点の我々への与えられ方から、このポイントを説明する。

我々は、空間点とは何かを、ある現実の対象に関する記述を有意味なものとするのは何かを明らかにする論理的分析の結果、「空間点を意味する記号の有意味な使用に着目すること」によって知る (WWK 213)。ゆえに「空間点は、我々の命題に現実の対象とは全く異なったものとして現れる」(ibid.)。この論理的分析がいかなる仕方で実行されうるのかは不明であるが、その論点は次のようなものである (WWK 213)。物体の位置の記述は、「それが真であろうと偽であろうと、ある可能な事態に対応して」おり、この可能性が、空間点である。したがって「この可能性は、その物体の位置を記述する命題が有意味であることによって、表現され」、「空間点の全体は、物体の位置の可能性の全体に対応し、それゆえそれは、有意味な命題の集合に対応する」。

このような仕方で、空間点と現実の対象とを区別することのポイントは、「空間点を現実の出来事から構成」(WWK 214)しようとする見解(ウィトゲンシュタインはこれをラッセルに帰している)を、批判することにある。

この見解に反対してウィトゲンシュタインが提出する見解によれば、空間点の集合、つまり物体の位置に関する可能性の空間は、すべての空間点を与えることが可能な、当の空間の原理(再帰的なものであるという以外に、この原理がいかなるものであるかは不明ではあるが)によって、空間点の間の諸関係とともに、いわば一挙に与えられる (WWK 215)。つまり空間点の集合は「体系」を成す。この見解によれば、可能性とは経験に先立って展望されているものであり、我々は可能性の中において初めて何かを発見する (WWK 214)。発見された事実からの一般化によって、新たな可能性が付け加えられたり、ある可能性がいまだ未知の事実によって前以て排除されたりはしない。また空間点相互の関係が新たに発見されることもない。

ウィトゲンシュタインは次のような議論からこの点を明らかにしようと

する (WWK 214). 自己を起点とした空間把握において, ある物体がここにあるという記述が理解できる人は, 当然, ある物体がそこにある, 向こうにあるという記述も理解できる. この理解の連関がない人, 例えば前者の記述は理解できるが, 後者の記述が理解できない人には, 我々と同じような空間把握を帰することはできない. そもそも前者の記述ですら, 我々と同じように理解しているとは言えないだろう. ここでウィトゲンシュタインの持ち出している論点は, 命題理解の相互連関性という, 「体系」成立の基盤となる概念である. しかし先のウィトゲンシュタインの反対する見解によれば, このことは単に, その人がこのような事実を経験したことがないからという事になってしまう.

「ある体系の原理を知るならば, 我々はその全体を知るのである」(WWK 216)とあるように, 空間点の集合, つまり物体の位置に関する可能性の空間は, 全ての空間点を与えることが可能な, 当の空間の原理によって, 空間点の間の諸関係と共に, いわば一挙に与えられる. そしてこの空間は, 物体の位置に関する有意味な命題の範囲に対応するという意味で, これらの命題を有意味なものとする構文論的な可能性の空間であるとも考えられる. 「全体」に対して「体系」を持ち出すことのポイントは¹⁹⁾, このような可能性の空間が, ある特定の一般的命題が真であることによって与えられるのではないことを明らかにすることによって, 可能性を現実性へと還元しようとする傾向を断ち切ることにある.

結 語

空間点の集合が, 物体の位置に関する記述が有意味であることを可能とする, 可能性の空間であるように, 論理空間とは, 記述全般を有意味とする可能性の空間であった. そして「3-2」で見たように, その原理とは命題の一般的形式や論理形式である.

「1-1」で見たように, フレーゲは論理法則といった一般的命題に「論理学」を基づけていた. ここからフレーゲは, 論理学をそれ固有の真理を扱う科学と見なすにいたった. 「実在の最も普遍的な特徴」にかかわるといったフレーゲ「論理学」の見かけは, ウィトゲンシュタインの目から見

るならば、可能性を現実性へと還元することにほかならない。ウィトゲンシュタインにとって可能性とは徹底して構文論的な観念である (WWK 215)。これがフレーゲの論理観に対する批判の哲学的動機である。しかし「3-2」で見たように、フレーゲに「論理的な一般性」もしくは「体系」に相当する概念がないわけではない。むしろフレーゲにとっての主眼は、このような構文論的な次元に止まらず、更にそうした基礎の上で、法則の確立を公理的な形で実行することであった。ウィトゲンシュタインは、この主眼を切り詰め、この切り詰めをその独自性とするような自らの論理学を提唱する。そしてウィトゲンシュタインをこの切り詰めへと走らせた「哲学的動機」とは、可能性を現実性へと還元することの拒否という、生涯彼をとらえて離さなかった信念である。

注

- 1) 「概念記法」という概念が、フレーゲやウィトゲンシュタインにとっていかなるものであったかは、次を参照。Diamond, C., 'What Does a Concept-Script Do?', in: *The Realistic Spirit*, MIT Press, 1991, pp. 115-144.
- 2) フレーゲが「すべての人間は……」といった命題によって表現される通常の一般性と、論理法則によって表現される一般性を全く同じように扱っているという評価は、厳密には正しくない。通常の一般性が、量化と束縛変項（フレーゲの標記ではドイツ文字）によって表現されているのに対し、フレーゲの幾つかの公理では、自由変項（ラテン標識）によって一般性が表現されている。したがって、後に見るような、フレーゲは量化と一般性を同一視しているというウィトゲンシュタインの批判は、厳密には正しくない。しかしフレーゲの体系では、自由変項を含む公理が主張されていることから分かるように、公理は単なる開放文ではなく、ある特定の内容を持つ命題である。以上のことから、ウィトゲンシュタインの批判を最大限有効に解釈するために、本節の強調部分で述べられている事態を、フレーゲに対するウィトゲンシュタインの批判の中心と解して論述を進める。
- 3) Frege, G., *Grundgesetze der Arithmetik*, Bd.1, Jena, 1893, S. xv.
- 4) フレーゲによる公理の「伝統的」な理解に関しては、次を参照。Burge, T., 'Frege on Knowing the Foundation', in *Mind* 107, 1998, pp. 305-347.
- 5) Frege, G., 'Logik', in *Nachgelassene Schriften* [NS], Felix Meiner, 1969, S. 139.
- 6) Weiner, J., *Frege in Perspective*, Cornell University Press, 1990, p. 70 参照。注3) で述べたように、フレーゲの公理は、単に束縛変項のみならず、自由変項によっても定式化されている。例えば数式に現れる自由変項の変域が、通常は数のみ

に制限されているのに対し、公理に現れる自由変項の変域は、このような制約を持たない。どちらの変項も、その変域に関しては無制約的である。フレーゲにとって、自由変項のみならず、量化と束縛変項を必要とした動機は、例えば部分否定と全称否定の区別の場合に必要となる、普遍性の作用域を境界付けることにある。

- 7) このことが（ある解釈の下ではあるが）フレーゲの哲学に引き起こす緊張に関しては、次を参照。Ricketts, T., 'Frege, the Tractatus and the Logocentric Predicament', in *Nous* 19, 1985, pp. 3-15, 特に pp. 10-11 を参照。
- 8) この点に関してはラッセルも同様である。Russell, B., *Introduction to Mathematical Philosophy*, Unwin, 1919, p. 169. 以上の解釈の大部分は、「実在の最も普遍的な特徴」という言葉も含めて、次の論文に負う。Ricketts, T., 'Pictures, Logic, and the Limits of Sense in Wittgenstein's Tractatus', in *The Cambridge Companion to Wittgenstein*, Cambridge University Press, 1996, pp. 59-99. 特に pp. 59-64 を参照。
- 9) この解釈の利点に関して。否定は命題論理と述語論理のどちらに現れる場合でも（例えば“ $\sim p$ ”と“ $(x).\sim fx$ ”）、同一の操作と考えることができる。命題論理と述語論理での否定の使用の違いは、単に当の操作が適用される命題の特定仕方の違いにある（「T2・3」を参照）。このことによって、命題論理に現れる否定の概念は、述語論理に現れる否定の概念と同じものと見なされうる(T5・451). Mounce, H. O., *Wittgenstein's Tractatus: An Introduction*, The University of Chicago Press, 1981, pp. 65-72.
困難について。
(1)“(x).fx”は、xに代入可能な対象が無限な場合には、無限の連言と同値であるが、このような無限の連言と、有限の連言を同じものと見なすことはできない。Moore, G. E., *Philosophical Papers*, Unwin, 1959, pp. 297-298.
(2) ウィトゲンシュタインの一般的命題の理論では、通常の数理論がカバーする領域(異なる種類の量化記号を含む命題の場合)をカバーしきれない。Fogelin, R. J., *Wittgenstein* (2nd edn.), Routledge, 1987, pp. 78-82.
- 10) このような洞察の背景には、フレーゲの文脈原理の影響(T3・3)がある。なお“ ξa ”といった表記を表現“a”の適切な表記とする解釈は、アンスコムによる。Anscombe, G. E. M., *An Introduction to Wittgenstein's Tractatus*, University of Pennsylvania Press, 1971, p. 93.
- 11) このような洞察の背景には、「命題関数はその値である諸命題を不特定のに表示する」といったラッセルの命題関数についてのアイデアが存在すると思われる。次を参照。Russell, B., Whitehead, A. N., *Principia Mathematica*, vol. 1. (2nd edn.), Cambridge University Press, 1925, p. 39.
- 12) ラッセルによる『論考』の序文を参照。Russell, B., 'Introduction', p. xv.
- 13) “fa”を要素命題, ξx をその論理形式と仮定することは厳密には正しくない。ここでは、あくまで議論の単純化という便宜上の理由によってこの仮定をしているに過ぎない。
- 14) 述語が名前の配列の仕方を表すとする解釈は、次の論文に負う。野本和幸, 「現

代意味論における『論考』の位置」、『現代思想』臨時増刊 総特集ウィトゲンシュタイン, vol. 13-14収録, 青土社, 1985年, 372頁-401頁, 特に387頁を参照.

- 15) Frege, G., 'Ausführungen über Sinn und Bedeutung', in [NS], S. 128.
- 16) 次を参照. 野本和幸, 『フレーゲの言語哲学』, 勁草書房, 1986年, 62頁.
- 17) エヴァンズは, 思想の本来的な構造化を述べる際に, このような洞察を「一般性制約 (Generality Constraint)」として定式化している. Evans, G., *The Varieties of Reference*, Oxford University Press, 1982, pp. 100-105.
- 18) ウィトゲンシュタイン中期における「体系」という概念の重要な側面は, 命題が単独で真偽の検証にさらされるのではなく, 「体系」をこみにして検証されるという側面である. 本稿では, 要素命題の相互独立性を主張するウィトゲンシュタイン前期の論理思想の解明を主眼とするので, この側面は扱わない. 実際, 我々が問題としている付論「全体と体系」にも, 「体系」に関するこの側面についての議論は登場しない.
- 19) 『論考』の「根本思想」である「論理定項は代表機能をもたない」(T4・0312) といった主張は, 操作と関数の区別に基づいているが, この区別は, 体系と全体といった区別の帰着点であるとウィトゲンシュタインは, 述べている(WWK 216). このことから, ウィトゲンシュタインにとってこの区別が非常に重要であった事がわかる.

略号

NB: Wittgenstein, L., *Notebooks 1914-1916* (2nd edn.), The University of Chicago Press, 1979.

T: Wittgenstein, L., *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge, 1922.

WWK: Wittgenstein, L., Waismann, F., *Wittgenstein und der Wiener Kreis*, Suhrkamp, 1967.